様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０６５８４

研究課題名（和文）初期近代英国演劇における少年俳優と舞台上の効果をめぐる研究

研究課題名（英文）Boy Actors and Effects of Performance on the Early Modern English Stage

研究代表者
木村　明日香（Kimura, Asuka）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教

研究者番号：７０８０７１３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではシェイクスピアが座付き作者を務めた宮内大臣一座（1603年からは国王一座）が上演した戯曲を、少年俳優の思春期の身体やジェンダーの曖昧性、少年俳優と大人俳優たちとの関係に注目して再読した。シェイクスピア劇の女性キャラクターがすべて少年俳優によって演じられたことはよく知られているが、少年俳優は具体的にどのような身体的特徴を持ち、社会の中でどう位置づけられていたのか。こうした問いを出発点に戯曲の精読と歴史研究を組み合わせ、当時の舞台における女性表象を三次元的に想像することを目指した。二年間の研究期間において、学会発表２本と学術論文３本（査読付は２本）、学会発表要旨１本を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
イギリス・ルネサンス演劇研究では特に2000年以降、初期近代の劇場の物質的条件への関心が高まっている。具体的には当時の舞台上演で用いられた衣装、小道具・大道具、ジェスチャー、俳優の身体、劇場の構造などに着目し、テクスト読解だけでは見つけることのできない新しい解釈や戯曲の可能性を明らかにしようとするものである。本研究は個別の俳優や俳優同士の関係性に注目し、戯曲を三次元的に浮かび上がらせ、俳優の身体を通じた間テクスト性を明らかにしようとするものであり、こうした近年の研究的動向に連なっている。

研究成果の概要（英文）：This research aimed at imagining the theatrical performance on the Shakespearean stage, especially the representation of women, three-dimensionally through close-reading of play-texts and historical research. Although it was often proclaimed that boy actors on the Shakespearean stage were invariably prepubertal, sharing many physical features with women, including voice and physique, it was probably not the case. Not a small number of boy actors were in their late teens or early twenties, suggesting they had already changed their voice or grown beard. Drawing on recent research in early modern theatre, I explored how female characters appeared on the early modern stage. For instance, in John Webster's The Duchess of Malfi, the protagonist is likely to have been impersonated by Richard Robinson, who was in his mid-teens or early twenties. If Robinson had a changed voice and male physique, the Duchess's formidable image as a widow ruler must have been stressed.

研究分野：初期近代イギリス演劇

キーワード：女性表象　パフォーマンス・劇場の物質性　初期近代イギリス演劇　少年俳優　ジェンダー・セクシュアリティ

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は 2016 年 12 月に審査通過した博士論文で得た着想に基づいている。博士論文では 1576 年から 1642 年にロンドンの公衆劇場で上演された戯曲における寡婦の表象を、当時の劇場の物質的条件と絡めて考察した。具体的には衣装、俳優の身体、小道具・大道具、劇場構造などが与えた影響を歴史資料と文学テクストの精読を通じて論じるものであった。その執筆過程で少年俳優に注目することがしばしば舞台上での寡婦の表象に新たな解釈を与えてくれることに気づいたのが本発表の出発点である。

成人俳優と少年俳優から構成されるいわゆる大人劇団で活躍した少年俳優たちのジェンダーの曖昧性についてはすでに多くの批評家が論じており、Jardine (1983)、Stallybrass (1992)、Orgel (1996)の論考は特に影響を与えた。当時の劇場ではすべての女性役を少年俳優が演じたわけだが、そのことにより女性はどのように表象されたのか。観客たちは女性の衣装をまとった少年俳優たちを舞台の上で目にするとき、男性と女性、どちらの身体を観ていたのだろうか。Jardine、Stallybrass が提唱したこうした問いを Orgel は引き継ぐと同時に新しい基軸を持ち込んだ。彼は多くの少年俳優が大人俳優の見習いとしてギルドに所属していたことに着目し、その労働と肉体がマスターの所有物とみなされたことが、少年俳優をいわば女性化し、男性の性的対象にしたと論じたのである。一方、Kathman (2005) は大人劇団で女性役として活躍した少年俳優の年齢層が 12～22 歳と幅広かったことを明らかにし、少年俳優の思春期の身体とジェンダーの曖昧性を女性性だけでなく男性性にも着目して捉え直すことの必要性を示した。Bloom (2007)、Mann (2008)、Astington (2010)もそれぞれ少年俳優の声が必ずしも声変わりしていなかったとはいえず、むしろ多分に男性的な要素を含んでいた可能性があると指摘している。また大人俳優と少年俳優の関係性についても、Orgel が論じたような社会的・経済的主従関係だけでは捉えきれない部分もあり、たとえば McMillin (2004)は少年俳優が役者として大人俳優のよきライバルになりえたことを示唆するだけでなく、マスターと見習いの関係性を家族的な愛情に基づいたものとしても捉えられることを示した。

２．研究の目的

本研究は上記に述べたような研究動向を鑑み、少年俳優のジェンダーの曖昧性ならびに大人俳優と少年俳優の関係性をより多様で複雑なものとして捉え直し、そこから戯曲の新しい解釈や、俳優の身体を媒介とした間テクスト性の可能性、当時の演出方法などを探ることを目的とした。声変わり前の少年俳優と、すでに声変わりした少年俳優が女性を演じるのでは印象が変わったはずだが、劇作家たちはこれをどのように利用しただろうか。当時の観客が役者たちの特徴や関係性、それまで演じた役柄などを把握していたとすると、キャラクターたちもまた違ったものとして表れたのではないだろうか。特にこれは少年俳優と成人俳優の関係においてどのような表れ方をしたのか。本研究はこうした問いを軸に進められた。なお対象とする戯曲はシェイクスピア劇を含む宮内大臣一座・国王一座のレパートリーとした。これは同劇団に関する一次資料・二次資料が他の劇団に比較して圧倒的に多く、研究が円滑に進むだけでなく、実りあるものになると判断したためである。

これは初期近代演劇の大きな特徴の一つである少年俳優に関する学術的な理解を深めるきっかけとなると同時に、現代における上演･演出にもなんらかの示唆を与えうるものだと考える。

３．研究の方法

初期近代の戯曲を俳優に着目して考察する試み自体は新しいものではない。たとえば Baldwin (1927) はある典型的な役柄と特定の俳優を結びつける character type casting を行い、シェイクスピアの劇団の俳優たちがそれぞれどのような役を演じたのか推定した。この手法には厳密さを欠いたところがあり、Howard (1985) に根拠のなさを一蹴されたが、同時に Knutson (1991)に代表される repertory studies の台頭は、当時の劇団が短期間に多くの戯曲を上演する必要があったこと、その上で Baldwin が提唱したような character types による役割分担には（彼の議論自体の正当性は別として)多少の蓋然性があること、また特定の俳優を念頭に劇作家が登場人物を造形した可能性があることを示唆している。こうした背景を踏まえ、Baldwin のようにしばしば性急に役柄と俳優を結びつけることなく、King (1992) が行ったような戯曲とその他一次資料の精読を旨として研究を遂行した。Bentley (1941)、Chambers (1923)、Gurr (2004)などを出発点に個々の俳優について調査しながら、劇団に関する資料などから劇団員同士の関係性を考察した。

手続きとしてはまず日本で研究対象として指定した戯曲と、その前後に国王一座によって上演された戯曲の精読を行ない、入手可能な二次文献と EEBO、Internet archive などの電子データベースで閲覧できる一次文献を用いて、渡英時に参照したい文献の書誌情報などをまとめた。平成 30 年度の渡英時にはそのリストを参考に大英図書館、国立公文書館などで当時の出版物ならびにマニュスクリプトの収集を行い、日本帰国後も引き続き分析を行った。

４．研究成果

平成 29 年度の活動内容については別途報告済なので割愛し、ここでは平成 30 年度の活動報告と今後の予定を記述する。平成 30 年度は学術論文（査読付）２本（査読無）１本、学会発

表要旨１本を発表した。

本研究と特に関わりの深い「『モルフィ公爵夫人』における少年俳優の舞台上の効果」（関東英文学研究 11 号）は平成 29 年度に行った第 56 回シェイクスピア学会での発表原稿を発展させたもので、少年俳優の思春期の身体と親方にあたる大人俳優との関係性が、同悲劇における女主人公の表象に与えた影響について論じた。内容としては、まず初演で公爵夫人を演じた可能性の高い少年俳優を 1623 年に出版された戯曲の版本を含む一次資料から割り出し、その人物である Richard Robinson がどのような俳優だったのかを同時代に上演された複数の戯曲から明らかにした。彼は女役として人気のある少年俳優だったようで、たとえば Ben Jonson の *The Devil's an Ass* (1616) には彼の名前がそのまま言及されている。また John Fletcher 作 *Bonduca* (1610)の出演俳優リストにも名前があるが、リストに掲載された俳優のうち彼のみが少年俳優であることから、主役の女王を演じたことはほぼ間違いないだろう。その後 Robinson の推定年齢を割り出し、そこから彼が 10 代半ばから後半だったこと、すなわち声変わりや背の高さなど男性的な特徴を兼ね備えていた可能性を指摘した。こうした思春期の少年俳優の男性的な身体は舞台上で男勝りな女である公爵夫人の表象に大きな影響を与えたはずである。また Robinson が名優 Richard Burbage の見習いだった可能性が早いこと、Burbage が公爵夫人と対立する双子の兄 Ferdinand を演じたことをメタシアトリカルに解読し、公爵夫人による兄の男性権威に対する挑戦が、少年俳優による親方への挑戦と重ねられている可能性も指摘した。

「『アントニオの復讐』と『ハムレット』における夫の亡霊と寡婦の記憶」（*Shakespeare Journal* 5 号）ではマーストンとシェイクスピアの悲劇を取り上げ、宗教改革以降の死者の弔いと亡霊をめぐる言説と、中世・初期近代のテクストにおける夫の亡霊と寡婦の表象との関わりから論じた。宗教改革者たちが死者の弔いを無益だと否定し、亡霊をカトリック教会がでっち上げた虚構とみなした結果、死者に祈りを捧げる慣習はイングランドで禁止されたが、このことは死者とどう向き合うのかという問いを引き起こた。『アントニオの復讐』と『ハムレット』はいずれもこうした問いを軸としており、特にその中心に寡婦による夫の記憶の問題がある点で共通点がある。事実、これらの作品の類似性についてはこれまでも度々指摘されてきたが、本稿では寡婦と夫の亡霊の関係がどのように描かれているかという観点から二作品を比較した。『アントニオの復讐』はイタリア（カトリック教国）を舞台にした悲劇だが、寡婦は夫の記憶を大切にする貞淑な寡婦であり、彼女と息子のアントニオは夫を殺害した人物に復讐を仕掛ける。聖書には神は寡婦と孤児の味方であり、彼らを虐げる者に復讐を行うという考え方が繰り返し出てくるが、マーストンはこれを意識して寡婦と息子のキャラクター造形を行うと同時に、夫の亡霊を聖書におけるところの神と重ね合わせることで、復讐を神聖化していることを指摘した。

「『英雄の証明』における『コリオレイナス』解釈の新たな可能性」（英語圏文化研究 UTokyo12 号）は査読無の論文だが、2011 年公開の映画『英雄の証明』（原題 *Coriolanus*）を取り上げている。シェイクスピアは観客がコリオレイナスの内面に触れる機会をあまりもうけず、たとえば観客はコリオライ征服後に堂々と現れる勇敢な戦士としての姿しか目撃しないが、『英雄の証明』ではコリオライ侵入後の彼の動きに焦点を当て、優れたカメラワークを通じて、コリオレイナスが勇敢な戦士でありながら同時に恐怖を抱えていること、観客と等身大の人物であることを示した。こうした工夫はシェイクスピア劇ではなかなか見えてこないコリオレイナスの心理を掘り下げると同時に、同戯曲の新しい魅力を発見していることを指摘した。

最後に学会発表のプロシーディングとして『初期近代演劇における寡婦表象と喪服の意味の多様性』を執筆した。戯曲以外の一次文献から、寡婦の喪服が夫を亡くしたことの悲しみと、夫に対する忠誠と貞節の表われとみなされる一方で、黒い衣服が女性の白い肌と赤い頬などを際立たせ美しく見せることで、男性の視線を引きつけるものとしても語られたことを明らかにした。また喪服は悲しみと貞節の象徴である一方で、それは自由にまとい脱ぐことができるものであり、こうした意味の表層性を利用して、喪服を着ながら浮気をする寡婦などを皮肉に描いた劇が 1600 年代初頭に活躍した少年劇団によって多く上演されたことを指摘した。

同研究を通じて得られた洞察や疑問点は 2019 年度より新たな科研費プロジェクトに引き継がれることとなった。本研究を進める過程で少年俳優をめぐる研究のほとんどが少年俳優と大人俳優の関係、見習いと親方の関係に着目しており、少年俳優同士のヨコの関係に言及する研究はほぼ皆無である。しかしながら少年俳優は大人俳優からの演技指導だけでなく、同じ親方に指導を受ける先輩少年俳優や、元少年俳優だった大人俳優からも学ぶことは多かったはずで、宮内大臣一座・国王一座の戯曲には女性キャラクター同士＝少年俳優同士の仲睦まじいやり取りや、逆にライバル感情を示唆するようなものも少なくない。2019 年 4 月から三年間、このプロジェクトに取り組むこととなったが、こうした意味でも本研究の成果は実りあるものだったといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

① 木村明日香、「『アントニオの復讐』と『ハムレット』における夫の亡霊と寡婦の記憶」*Shakespeare Journal*、5 号、36〜51 頁、2019 年、査読あり

② 木村明日香、「『モルフィ公爵夫人』における少年俳優の舞台上の効果」、関東英文学研究、

11 号、39〜50 頁、2019 年、査読あり
③ 木村明日香、『英雄の証明』における『コリオレイナス』解釈の新たな可能性」、英語圏文化研究 UTokyo、12 号、65〜74 頁、2019 年、査読なし
④ 木村明日香、『初期近代演劇における寡婦表象と喪服の意味の多様性』、第 90 回大会 Proceedings（日本英文学会）、187〜188 頁、2019 年、査読なし

〔学会発表〕（計２件）
① 木村明日香、第 56 回シェイクスピア学会（於近畿大学東大阪キャンパス）
『モルフィ公爵夫人と少年俳優』（2018 年 10 月 7 日）
② 木村明日香、日本英文学会関東支部第 15 回大会（於中央大学後楽園キャンパス）
『初期近代演劇における寡婦表象と喪服の意味の多層性』（2017 年 10 月 28 日）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。